

「花と街灯」

筆跡の波に吞まれて掠れた色鮮やかなピオニーレッドを眺めていると、帰りがけの橋上にそびえ輝く街灯を思い出す。その情景を追想しキャンパスに絵具を塗り重ねる。するといつしか明滅するテールランプの赤色は私の既知の外でキャンパスの上に一輪の紅い花を咲かせた。その花は野原に咲く顔を見せ、空に広がる無数の黄色い稜線は自然と身を潜める。これまで慎重に積み重ねてきた痕跡が忽然と姿を消す。私は恐れた手で尚も筆を振り、色を重ねる。だがそこには必然的な直感がいつもある。せつな、筆を置き落ち着きを取り戻す。そして眼前に取り残された未視の情景は花と街灯だけだった。



花と街灯
2021
Oil on canvas

不意に何かに目を奪われ、画布に一本の線を引く。衝動的な情緒によって生まれた線。その線はガラスの稜線であり、ねこのしっぽかもしれない、ときにはなにものでもない線である。そうして描かれた線がざらついたキャンパスの上で歪みを生む。すると、私の描いた絵画自体が私自身に対して反射的もしくは反復して言及をはじめ。表層に描かれた像に揺られながら、暗礁の景色を追い求める。事実、私は私自身の所作をまったく受け入れることができないのだ。私の絵画は断続する自己否定の形態として表層を成してゆく。そしてあまねく流動の中にこそ真に描くべき情景が立ち現れると確信する。

「スライダー」

ひびの入った消しゴム。壊れたパソコン。割れたガラス。そのときの私を惹き寄せたのは役立たずの愚かな廃品たちだった。そのよしみを描こうと思い立つ。同時に図像が持つある種の明示的な性質や形態への抵抗を抱く。像の持つ意味性に抗い、描くべきイメージの霧をどうにか掴もうと足掻く。しかし画面には未だ明示された図像の痕跡を残しながら私はおもむろに筆を置く。その折、衝動の束の間に醒めた思察は自らの絵の掌握を断念させ、私の思惑とは裏腹に図像のリアリティーを半ばあらわに曝し残すことにより、切迫した緊張感と肉薄した表層を絵画空間に垣間見たのだった。



スライダー
2021
Oil on canvas

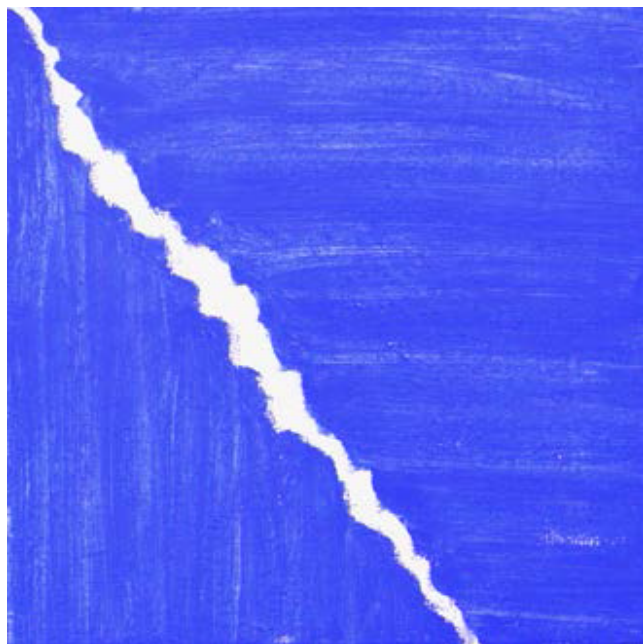


半グラス
2021
Oil on canvas

ある情景が目浮かぶ。私がこれまでに経験した記憶の奥底に眠る欠片たち。取り立てる程もない。そんな情景。あるいは全くもって象徴性を欠く品物たち。無属性の品。廃品。そんなものをふとしたとき目の端で捉える。これまで私の絵とは無縁だったものたち。しばしばそういったものが絵を描くための鉤となる。しかし私が描き得たいものは決してそのもの自体であることはない。あくまで彼らは概念であり、絵画にとっての素材に過ぎない。そして私の絵画はおおよそ起因となった記憶やモチーフから逸脱し、未だ観ぬ情景を絵画空間に形成していく。

「空中落下」

描こうと思い立つ。パラシュートはいらない。水上からではまるで見通せない遥か空の彼方から墜落する。四肢は気流の渦に飲まれ成す術無く落ちてゆく。もがいた手を振り回し真っ白なぶあつい雲を掴もうと試みる。しかし脳裏ではいつでも遊覧落下なのだ。着水に備えるな。無為に身を任せて、落ちてゆけと唱える。その先に未だ見得ぬ領域があるのだから。



ブランコ
2021
Oil on canvas

乾いたキャンバスに筆で絵具を塗る。描いた筆跡は徐々にキャンバスの網目と絵具の重なりの中に溶け込んでゆく。そしていつしか絵具の積み重なりの様相や画布上に生まれた表層の情感、色面の変容に集中し、私はそれらの事象に埋没してゆく。私にとってその感触は必然でありそれこそが真実である。ところが、一息入れ落ち着いた目で私が描いた筆跡それ自体を観察し意識を筆跡に注視するとき、私は自身の描いた筆跡に対して疑いをもち始める。果たして私の描いた筆跡は絵画空間の中で何を表しているのか。そもそも何かを表すための稜線である筆跡とは言語的な束縛を受けた筆致ではないのか。私が夢中で描いた筆跡は経験の元に構築された故の筆致ではないのか。そのような筆跡は私の絵画空間の中でよい役割を成しているのだろうか。数多に廻る思案の中私の導いた筆跡がいつしか私から遠く離れてゆく感覚に陥る。そしてまた、私は性懲りもなく筆を握る。